

科目区分：専門教育科目 国語教育
授業科目名：日本近代文学概説
担当教員：国語教育講座、青木亮人

「日本近代文学概説」の授業評価

1. 授業の基本情報

日本近代文学概説は専門教育科目で、中等国語コース2回生は必修科目、また小学校サブコース及び特別支援教育教員養成課程の学生が小学校及び中学・高等学校国語教員免許取得のために受講する選択科目である。令和4年度は約42名が受講した。

主に二年次対象の前期開講科目である点、また複数のコースの受講生という点を考慮すると、受講生は近代文学に関する予備知識をほぼ持たないと仮定し、内容は近代文学史の入門編という位置付けでまとめた。

授業展開としては時代順に作家や作品を紹介し、また各回ごとにテーマを設けた。加えて、昨年度における同科目における成果と課題を踏まえた今年度の取組みについて検討を行うため、具体的な展開は下記の通りとした。

- 01: 文学者の写真から教科書文化を考える
- 02: 泉鏡花作品から近代と現代の文化表象の差異を考察する
- 03: 北原白秋の短歌を例に読者の想像力を考える
- 04: 島崎藤村の詩を通じて「作品」を読むとはいかなることかを考える1
- 05: 島崎藤村の詩を通じて「作品」を読むとはいかなることかを考える2
- 06: 夏目漱石「坊っちゃん」を通じて近代文学の本質を考える
- 08: 芥川龍之介「秋」を通じて近代文学の特徴を考える
- 09: 太宰治「女生徒」を通じて「日常」を考える
- 10: 太宰治の他作品を通じて「日常」のありようを考える
- 11: 東直子・穂村弘『回転ドアは、順番に』を例に読者の想像力と読書体験を考える
- 12: 俵万智の短歌における「文脈」の読み取り方について
- 13: 「青空」の表象に見る西洋文化と日本サブカルチャーの表現について
- 14: 近代文学の極北、川端康成の非人間性について

て

15:まとめ

昨年度における同科目における成果と課題を踏まえ、た今年度の取組みについて検討を行うため、上記の各回を行う際、下記の点に留意した。

- ・教員志望者が多いため、将来、国語を学校教育で教授する際に有益な知見や発想、留意すべきことを説明の際に加える
- ・近現代文学に関する詳細を知らない受講生が多いため、専門的な内容に関してはその背景や文脈等を時間を割いて説明する
- ・同時に、専門的な知見を要せずとも理解しやすい短詩形韻文を入口とすることで、近現代文学の要点を実感させる
- ・写真、映画、音楽等の他ジャンルのメディアも多用することで、近現代文学に通底する近現代芸術全般の発想や認識を実感させる
- ・地域社会と文学には密接な関係があることを実感してもらうため、芥川龍之介等の著名文学者や芸術家が愛媛県に深い関係の深いことも紹介した

加えて、授業中のやりとりやコメント等からは著名な文学品の名は知っていても読んだことがない受講生が多々見受けられたため、授業内で扱う作品を授業時間外で読むよう指示した。

なお、成績評価は各回の発表・質疑応答・出席等により総合的に判断することとした。

2. 授業評価・授業研究の内容

シラバスに記載したのは下記の通りである。

【授業目的】

日本近代文学の幅広い特徴を知ること、国語教育の現場で役立つ「文学」概念を培うとともに、それに留まらない「文学」の魅力を多方面から学ぶ。

【到達目標】

- ①日本近代文学の流れや特徴、その目指す方向性を把握することで、「文学＝国語」の理解を深めることができる。
- ②日本近代文学史について具体的なイメージを持

ち、説明することができる。

上記の目的・目標を、先に述べた「授業概要」での授業展開の中で実感してもらうことを目指した。

また、学生アンケートを行った。項目は下記の通りである。

1. 最も印象に残ったこと
2. 地域社会と諸芸術について

各項目を概略すると下記の通りである。

1 について

- ・教科書に掲載された文学者や作品を基本に、近代文学についてそれなりに知っていると思っていたが、泉鏡花等の知らない文学者が多く存在したことに驚いた。
- ・「坊っちゃん」や「走れメロス」など、これまで教わってきたり、感じたりした解釈と全く異なるテーマが実は作品にあったことを知って驚いた。
- ・太宰治など読んだことのある作家が、他にも面白い作品を書いていたことを授業テキストを通じて知ることができた
- ・文学者には虐げられた生活や自殺、苦悩、反倫理的な生活など、暗い生涯を送る作家が多いことが印象的だった。
- ・文学作品は特別なものや大きな出来事、人間の真実といった深い内容を書くべきとどこかで信じこんでいたが、そうではなく、ささいな日常や平凡な毎日の何気ないひとときといった、忘れがちな取るに足らないことこそ大事で、大切なものと描く文学作品も多く存在していたことに驚き、「文学」の幅広さを実感した。
- ・学校教育で教えることは「道徳」なのか、「文学」なのか、線引きは難しいが、国語教育の多くは無意識的に「道徳」的な読解が多いかもしれない、ということに気付いた。

2 について

- ・芥川龍之介や若山牧水などの有名な文学者は教科書世界での存在のみと思っていたが、自分の住んでいる土地と関係があったことに驚いた
- ・文学作品の読解は、内容や筋を理解したり、主人公の心情を理解する中でその作品が面白いかな否かを判断する傾向が小学校から培われる傾向にあるが、有名か無名か、分かりやすいかな否かでなく、自分の郷里や住んでいる県、土地に関係があるかな否かで文学作品を横断する感覚は今までなかったので、新鮮だった
- ・自分の土地の文化や文学について今まで知る機会がなく、また知ろうとしなかったことなどに気付いた。「文化」は一つの見方だけでなく、多様な見方があることに気付けた

上記のような結果となった。

3. 地域社会を核とした教育と研究のつながりについて

工夫点としては、著名文学者や多様な芸術家が実は愛媛や各受講生の出身地にゆかりが深いことを指摘しつつ、実際の作品や逸話等を紹介することで、これらを研究することが地域社会文化を捉え直すことになり、また教科書掲載の著名文学者や作品そのものの再解釈にもつながることを説き、また文章のみならず写真やテレビ番組等も随時参照しつつ、日本国民が一致して学ぶべき教科書文化と異なる、「芸術と郷土」を各地域の学校教育で実践した際の効果や留意点等を授業展開の中で述べた。

難しさについては、参照資料自体が専門的な性格の資料も多く、仮に受講生が本科目で「芸術と郷土」という視点を獲得したとしても、受講生が将来教員となった際、授業準備の際に本科目以外の芸術家や文学者を扱う際の専門資料をどの程度収集し、分析可能かは実際の教員生活に則して仮定すると困難な点も多い。従って、本科目で示した知見は一知識に留まり、将来の教育実践まで発展させることが可能か否かは本科目の授業目的と異なる受講生の資料収集能力に係っている点が多い。本科目で受講生に示した知見をいかに将来の教育実践に直結させるためのさらなる工夫が必要と感じられた。